

96歳の雑感

ながれ

上遠 恵子 (かみとお けいこ/レイチェル・カーソン日本協会 会長)

暑い夏でした。夏に生まれた子は、暑さに強いと言われて育った私ですが、さすがに今年の暑さはこたえました。電気代を心配しつつエアコンを使うという日々でした。まだ小学生だった昭和16年(1941年)ごろ、「今日は暑いねえ30度もあるよ」などと友達と話したことなどを思い出します。この原稿を書いている9月25日、まだセミが鳴いています。地球温暖化は、確実に進行しているのだと思います。

地球温暖化を絶対に認めないトランプ大統領は、海に崩れ落ちる氷河や、狭まっていくアルプスの雪渓の映像を見ていないはずはないと思うのですが、政治家の頭の構造は科学的根拠を受け付けない特殊のようです。ただ、私が不思議に思うのは、いわゆる側近と言われる人たちも皆、地球温暖化を否定しているのでしょうか。もし、個人の考えを立場上変えなければならぬとしたら、それは恐ろしいことだと思います。私たちも、暑さをぼやいているだけでなく、この異常な暑さの原因となる地球温暖化について、しっかりと勉強しなければと思っています。

ある小さな会報の編集会議のことです。8月号の企画をする会議でした。担当者が出した編集案を見て感じたことは広島、長崎についてのことや平和についての言及がないことでした。戦後80年という節目に出す号として当然「平和」がテーマになると思っていたのは私の甘さでした。もちろん、平和をテーマとすべきではないかという私の意見は受け入れられたのですが、戦争は実感ではなく歴史上の出来事になっていることを感じました。

そこで、わが「NPO 法人環境文明21」の

事務局のある田園調布の戦中、戦後を書いてみることにしました。1923年の関東大震災の後、渋沢栄一氏の構想のもとに開発されたこの地域は住宅地として英国のどこかの街を参考にした洒落た住宅地でした。庭を広くして塀を立てず生け垣とするなどの決まりがありました。道を歩く人が庭を眺められるようにということです。私は1929年の夏、この地に生まれました。住民の多くは公務員、学者、実業家、教育者、芸術家、軍人などインテリ中産階級の人が多かったと聞いています。金持ちが多い街と言われるようになったのは戦後もだいぶ経った高度成長期のことで、私が育った頃は本当に仲の良い気楽な街でした。駅の東側は商店街でお店がありました。戦争中、東側の商店街は焼夷弾や爆弾が落ちて焼け野原となり、私の小学校の同級生の家は爆弾の直撃を受けて一家全員が亡くなりました。駅の西側は焼夷弾から免れました。

敗戦後、たくさんのアメリカ人が占領軍として東京に来て、田園調布の西洋風の家は高級将校のために接収されました。私の家の道を隔てた隣の家も接収されました。持ち主は、品の良い優しい老夫婦でしたが疎開先から帰ってくることは叶いませんでした。住んでいた日本人は、庭先にバラックを建てて暮らすという形です。彼らはよく庭でパーティーをするのですが、肉を焼く匂いが漂ってきます。敗戦国の私たちは食糧難で腹ペコの時代です。羨ましいなどとは絶対に思うものかと反発を感じたことでした。

ある日曜日の事です。防空壕に入れておいた衣類などを広げて干していた時、若いアメリカ兵がひとり突然、庭に入ってきました。

廊下にいた父にピストルを突きつけ「刀はあるか？」と。「ない」というと土足で部屋に上がってきて壁にかけてあった写真機と双眼鏡を取って出て行きました。母は私を押し入れに押し込み襖を閉めてその前に座り込みました。一瞬の出来事でした。警察に届けた数日後、MP(憲兵)がやってきましたが、それでおしまいです。

その頃の東横線には進駐軍専用の車両がありました。朝のラッシュアワー、日本人の車輛はギュウギュウ詰めで苦しいほどなのに、進駐軍専用の車両はガラガラという毎日でした。新聞に、『どこそで大男の強盗があった』などの記事が載ったのもその頃です。進駐軍の兵士の強盗と書けない記者のせめてもの抵抗であったのでしょう。私信もランダムに検閲があり Opened by occupy force という

シールが貼られていました。

私は、進駐軍の悪を暴きたてるつもりはありません。戦争というものがいかに人間性を変えてしまうかということを強調したいのです。平和であれば強盗などしないであろう若者を変えてしまうのが戦争です。

いま、ウクライナやガザで空襲に怯え、逃げ惑う人々は、八十数年前の私たちです。痩せ細った子どもが僅かな食糧を求める姿に戦中、戦後の空腹感を思い出して身につまされる私があります。私は、飛行機の音が苦手です。空襲の夜、近づいてくるアメリカの飛行機の音を思い出すからです。

どうか1日も早く平和が来ますように、飢餓に苦しむ子どもたちがおなかいっぱい食べられるように、笑顔が戻るようにと祈りつつ。

上遠さんの思い

上遠さんは、日本にレイチェル・カーソン女史の思想・考え方を広めたとても有名な方ですが、私の尊敬するそして大好きな、人生の大先輩のお一人です。彼女はカーソン女史の著書を多く訳されていますが、今回『センス・オブ・ワンダーを語る』を編著書として出版されました。

野生ゴリラの研究で有名な人類学者の山際寿一氏、生物学者の福岡伸一氏、生命誌研究家の中村桂子氏、「森は海の恋人」で有名な漁業家の畠山重篤氏の4名の講演と、上遠さんとの対談が掲載され、最後に上遠さんのエッセイが掲載された本です。

特に、上遠さんのエッセイ部分には、「センス・オブ・ワンダー」に込められた彼女の深い思いが書かれているので、個人的に気に入った文章をほんの少しだけ書きだしてみます。

- 「センス・オブ・ワンダーというのは、自然がきれいというだけではなくて、差別など社会のおかしなこと、そしてもちろん戦争と平和の問題、そういうものもしっかり考えられるのがセンス・オブ・ワンダーだと思います。」
- 「地球の一つの網み目であるはずの人間が、科学技術という大きな力を持ってしまったために、網み目にはほころびができています。それは生き物としての人間の生き方として非常に傲慢ではないかという思いに駆られて、彼女(カーソン)は『沈黙の春』を書いたのです。」
- 「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない
- 人間の欲望がパンデミックを引き起こした

等々、「きれいな日本語で、やさしく、自然に心に入ってくるように」という上遠さんの本を書く時の信念と、たおやかさの中にも戦争や社会悪に対する反骨心がにじみ出た、ステキな本です。

(藤村コノエ)

